Keio Associated Repository of Academic resouces	
Title	経済学史上における卸売価格・小売価格形成の理論: J・S・ミル、ケアンズ、シィジウィック、マーシャルの所説をめぐって
Sub Title	The Theory of Pricing in Wholesale and Retail Markets, Historically Contemplated
Author	村田, 昭治(Murata, Shoji)
Publisher	
Publication year	1959
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.2, No.1 (1959. 4) ,p.79- 98
	=
Notes Notes	This article aims to contribute to the clarification of the nature of the retail market by tracing the changes and developments of retail price determination which were incorporated in the economic theories of A. Smith, J. S. Mill, E. Cairnes, H. Sidgwick and A. Marshall. Chapter I of the article covers the price theory held by A. Smith in his work, "An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations." Smith asserted that perfect competition dio prevail even in the retail market and that prices would exactly cover the costs of production. Thus, the theory due to the assumption of perfect competition, as Smith thought, can neglect the problems which arise in the proper field of commerce. Nevertheless, the study of his thought is rewarding from the standpoint of an economic theory of commerce. Chapter II deals with the theories of price determination in the retail market and the wholesale market, which were mentioned by J. S. Mill. Mill pointed out the universal principle that there could not be two prices for the same goods in the same market. And an example of the competitive market was the wholesale market. On the other hand, in retail markets, there were many prices in different shops or even in the same shop. Mill's theory was established upon the thesis that retail price was determined by "Habit" and "Custom" rather than competition. Thus, Mill observed that ignorance, carelessness, indolence and some other causes made retail prices less regular. Since the middle of the nineteenth century, the markets were removed from conditions of perfect competition, and then dissatisfactions with competition as an explanation of retail price were evidenced in several works. In chapters III and IV, I shall refer to the opinions of E. Cairnes and H. Sidgwick who had a direct influence upon J. S. Mill and went further than Mill in the discussion of retail price determination. Cairnes, the last important English Economist to write in the classical tradition, did break away somewhat Smith's concept of competition
Genre	Journal Article
Genie	Journal Atticle

URL

https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19590425-04044228

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

経済学史上における卸売価格 ・小売価格形成の理論

J·S·ミル、ケアンズ、 シィジウイック、マーシ ヤ ルの所説をめぐって

村

昭

はしがき

ない。もし、これらの価格の開差がそれぞれただ単に費用の差にす れらが一定の価格差(費用の加減)をもつ、というだけの意味では らそれ程逸脱するものではない。 く感じられなくなる。(は1)(は1) 価格形成の分析は、どの段階の価格をとって分析したところで、そ ぎず、そこになんらの固有の特殊性も存在しなければ、この各種の て規定される。したがって、小売価格も卸売価格もこの一般原則か 形態をとって現われる。 ける標準的価格として、 のどれもが他のすべての価格を代表することとなり、理論的にはそ 市場価格は、商品の生産者から消費者にいたる流通の各段階にお これらの価格が、単に生産、卸売、小売の段階で決定され、そ 生産者価格、卸売価格、小売価格の三種 一般に商品価格は需要と供給の関係によっ しかし、 この区別が なされるの 0)

経済学史上における卸売価格・小売価格形成の理論

時に、 にした。したがって、そこでは生産は広くすべての効用の造出とし(注2) (注2) 業は交換と考えられ、その本来の機能は、生産者と消費者の対応を は、さきにスミスの商業論を考察した際に、スミスにおいては、 ならない。もちろん、この生産と消費との経済的隔離が、A・スミ 入する余地は全くなかった。それゆえに、そこでは生産過程と流通 も、その商業者は生産者の代理人にすぎないので)固有の商業の介 て考えられ、現実の 商業者の介入は 考慮されず、(たとえ介入して んらの屈折をももたらさないこともある。そして、このことは、 スの場合のように、機能的側面への認識にとどまり、 味を考える場合、それをまず価格形成の過程としてとらえなければ されえず、流通もまた生産の一過程であり、商業は生産の一領域に 過程との差異性は問題とはならず、ために流通過程の独自性は把握 さて、 商業固有の領域が全く問題にならないことでもあった。筆者 われわれが生産と消費の間の配給諸段階のもつ経済的な意 理論的にはな

の販売領域は問題になるべくもなかった。
のみが問題となるにすぎず(一つの価格の成立)、純粋商業者独自いる。したがって、価格形成の段階においても、単一の需給の対応するものとなって、世ぎない、と考えられるにいたる。すなわち、生産者は同時に商業すぎない、と考えられるにいたる。すなわち、生産者は同時に商業

者の本稿における課題である。 者の本稿における課題である。 者の本稿における課題である。 者の本稿における課題である。 者の本稿における課題である。 者の本稿における課題である。

は、実際には競争は無制限に完全に作用しうるものでは毛頭なく、し、われわれは、古典派経済学者が、競争理論の純化の面をはなれて正常状態の分析、競争理論の純化がその重要な課題であった。しかもちろん、かれらにとっては、スミスと同じく何をさておいても

読みとり、それに若干の意見をつけくわえようとしたものである。 に注目しなければならない。その一つの現われが、生産者価格、卸売 に注目しなければならない。その一つの現われが、生産者価格、卸売 なれば、もとより未だ整理されておらず、あまりにも断片的で、体系 みれば、もとより未だ整理されておらず、あまりにも断片的で、体系 のに かし、われわれは、「不完全競争理論」あるいは「独占的競争理論」から ることがおそかったかかる問題に対して、すでに古典派経済学者に おいて一応の認識が示されていたことを見落すわけにはゆかない。 以下、本稿の目的は、スミスの競争価格の理論体系に一瞥し、さら 以下、本稿の目的は、スミスの競争価格の理論体系に一瞥し、さら 以下、本稿の目的は、スミスの競争価格の理論体系に一瞥し、さら は、第一に、なぜかれらが小売価格の卸売価格からの乖離をとり あげているかをみて、つぎに、その乖離の要因が、経済学史上どの ように理論的にとりあつかわれてきたかを、文献的にふりかえって とりに がおとり あげているかをみて、つぎに、その乖離の要因が、経済学史上どの ように理論的にとりあつかわれてきたかを、文献的にふりかえって とり がおとり がおといる はいが とりあげらればならない。その一つの現われが、生産者価格、卸売に、は、対して、対して、対しないが、とが、対して、対しないが、とが、といいでは、対し、対しないが、といいである。

雑誌』第一二八号二三頁。 (注1) 山川義雄「経済理論と配給理論」()『早稲田政治経済学

究』第一巻第三号を参照されたい。(注2) 拙稿 「古典学派における商業理論の展開」『三田商学研

階)について、商品の流通を円滑ならしめるだけではなく、こ(注3) これは、 商業者が 生産と 消費の 各段階(卸・小売の段

という認識につながるもの。れらの価格形成の過程には性格の異るかれら独自の領域をもつ

経済学の父と称せられるアダム・スミスが、市場、取引および価格の研究に貢献した根本思想は、①分業、②経済的自利心、③自由格の研究に貢献した根本思想は、①分業、②経済的自利心、③自由なの研究に貢献した根本思想は、①分業、②経済的自利心、③自由な変換し(barter)、交易(exchange)する傾向の結果である。」した変換し(barter)、交易(exchange)する傾向の結果である。」した変換し(barter)、交易(exchange)する傾向の結果である。」した変換力(power of exchanging)である」から、分業の発達はいれた、交換力の大きさ、言葉をかえていえば、「市場の広さによって制約される」と喝破している。

利心の働かぬところに市場はなく、自由競争なきところに市場は存た。かくして、人が物を取引し、交換せんとする人類の自然的性向を発現せしめて経済的自利心を働かしめるには、諸種の制限のないているが、要するに、その適応力は市場の拡がりによるものであっているが、要するに、その適応力は市場の拡がりによるものであっているが、要するに、その適応力は市場の拡がりによるものであっているが、要するに、その適応力は市場の拡がりによるものであっているが、要するに、

的制度として、競争を励行せよという主張が流れている。た。すなわち、スミスの全ての書物の底には、神の摂理による自然在しえないとし、自利心と自由競争の二つが本質的要素となってい

格ではなく、競争の条件の下において、単に原生産費と卸・小売の 段階における経済的隔離を克服するに要する生産費用の合計にすぎ り、後者は異質体というべきものであった。(傍点筆者)また、スミ(注4) 用されるものである。そして、前者だけが彼の体系の一部をなしてお あてはまることが明らかであろう。そして、 べて生産費によって決定せられ、その理論は競争の条件の下でのみ ないものであった。こうみてくると、スミスにおいては、 小売価格は、それぞれの段階における需給の対応から形成される価 もに適応せしめられていた。したがって、スミスにおける卸売価格 われる現実の価格を意味していた。そして、この理論がそのまま生産 えられた需要供給関係にもとづいて自利心と自由競争とによって現 理論を展開している。一つは競争の場合であり、他は独占の場合に適 んらかの乖離をみる価格はすべてこの理論の範囲外なのである。 者価格についても、卸売価格についても、また小売価格についてもと スが自然価格にたいし市場価格を云々する場合、その市場価格は与 価格についてみればスミスは、二つの異なった局面における価格 競争価格の決定からな 価格はす

を加えることなく、ただスミスの見解をくりかえしているのみであして、シーニョアー、マカロックの双方ともに、これ以上さらに検討リカードオは、この問題についてなんらの記述をもしていない。そ

る。

武みている。 正統的運動を認識し、その一見奇妙な働き方を観察し、その分析を 正統的運動を認識し、その一見奇妙な働き方を観察し、その分析を 用において若干の独創性を発揮したJ・S・ミルは、小売価格の非 用において若干の独創性を発揮したJ・S・ミルは、小売価格の非 すなわち、かれらはスミスの理論的用具をほとんどなんらの批判

う。かくて、われわれは、まずミルの市場概念の分析から考察してゆこかくて、われわれは、まずミルの市場概念の分析から考察してゆこ

(注1) A. Smith, "An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations," by E. Cannan Vol. 1. p. 15. 大内兵衛訳「国富論」岩波文庫版〇三八頁。A. Smith, "Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms," edited by E. Cannan. 1896, pp. 168-9. 高島善哉・水田洋 訳「グラスゴウ大学講義」三三二—三頁。

(注2) A. Smíth, op. cit. p. 19 邦訳〇四五頁。

(注3) 杉本栄一「近代経済学史」ニニ―三頁、一四六頁。

1945. p. 65. 喜多村浩訳「経済学説史」一〇七頁。

(注5) ibid, p. 67. 邦訳一○九頁。

(注6) 拙稿、前掲論文『三田商学研究』第一巻第三号四九―五

〇頁参照

めている。(H. Smith, "Retail Distribution,"1937. p.108.)離についてのA・スミスにはじまる従来の諸説の回顧からはじ争理論の適用の場とし、その説明を卸売価格と小売価格との乖(注7) H・スミスも、小売商業の領域を不完全ないしは独占的競

云っている。「幸にして 価値の法則には、 現在および将来の著述家さて、ミルは、価値の問題について、自信をもってつぎのように

J・S・ミルであったのである。 (注2) J・S・ミルであったのである。 のようことを説いている。がしかし、種々なる需要供給状態のもたにある売手と買手との交互作用によって決定され、一つの市場での一つの財貨の価格が同じ時間に、一つになる傾向があることを説いている。がしかし、種々なる需要供給状態のもとにおいて市場価格は、自利的動機にかられ、かつ自由競争状態のないだすまでにはいたっていなかった。云いかえるならば、スミスなりだすまでにはいたっていなかった。云いかえるならば、スミスなりだすまでにはいたっていなかった。云いかえるならば、スミスないだすまでにはいたっていなかった。云いかえるならば、スミスないだすまでにはいたっていなかった。云いかえるならば、スミスないだすまでにはいたっていなかった。云いかえるならば、スミスないだすまでにはいたっていなかった。云いかえるならば、スミスないだすまでにはいたっていなかった。云いかえるならば、スミスないだすまでにはいたっていなかった。云いかえるならば、スミスないだすまでにはいたっていなかった。云いかえるならば、スミスないだすまでにはいたっていなかった。云いかる質向があることをであればれば、同じ品質の同じ種類の物財にたいして、同時に二個の価格が成立しえないという原理をうちたてたのは、ほかならぬこの情格が成立した。

price in the market)の原理が主張されている。る立言の中には、①自由競争、②経済的自利心、③一市場一価(oneることはありえない、と説いた。このようにミルの卸売市場に関す一品質の同一財貨にだいして、同じ時に二つの価格としてあらわれ

異なった価格で売られる場合があると云っている。要するに、同質 買手の怠慢、不注意、無知、判断の欠如、調査時間の不足などのた うに、消費者はしばしば公然と必要以上のすこぶる高値での購買を ないわけである。 店と安い店とがあり、その上、同じ店でさえも二つあるいは多数の 強いられる結果になる。すなわち、小売価格の場合には、そこでの びとる程の余暇も意欲もない。たとえいかに富者であっても、買手 然素人であって経済事情に無意識な場合が多いし、また、これを学 るかに限定された意味でのみ適用されるのであって、小売価格につ 人々が十分にその自利をはかろうとしない小売市場にはあてはまら の物品には二価なしという完全市場(perfect market)の概念は ている。また、同じ都市の同じ商売においても、商品の値段の高 めに、同一品質の財貨にたいして同一市場に二つの価格が現に存し もすることなくして、買い入れてしまうのが多いからである。このよ としては貧弱な買手であり、購入する商品についてなんらの質問を ている。なぜならば、小売市場における消費者は、取引の上では当 いては、この原理が卸売価格ほど完全におこなわれないことを認め ところが、これに反して、小売市場においては、上述の前提は

反する原理である慣習を軽視するのが常であった。いう二作用のうち前者のみを重視し、競争の結果を誇張し、他の相かくのごとく、イギリスの経済学者は一般に、競争および慣習と

価格との開差についての論及であったわけである。 にとりあげた一つの問題が、本稿で問題としている卸売価格と小売 いsage)の影響力を指摘している。そして、これらを説明するため な大いに見誤っているものとして、競争の無制限な作用にたいする を大いに見誤っているものとして、競争の無制限な作用にたいする を大いに見誤っているものとして、競争の無制限な作用にたいする が禦具(protector)として、とくに慣習あるいは慣例(custom or にとりあげた一つの問題が、本稿で問題としている句売価格と小売 価格との開差についての論及であったわけである。

のであった。
のであった。
のであった。
のであった。

その売値を異にすることがあることを説いた。これは小売価格につ舗によってそれぞれ異なり、同一の店舗であっても、顧客によってたのである。とくに、先にものべたように、日用品の小売価格は店の原理が卸売市場におけるほど完全におこなわれえないことを認めかくのごとく、要するにミルは、小売市場においては、一物一価

手は一般の消費者であって、もとより商人ほど自利心を鋭敏に発揚 理解すべきであろうが、ミルはその理由の説明において、小売市場 することをしないからである、と強調したのである。 では卸売市場におけるほど自由競争が十分におこなわれず、また買 いて未だ定価制度の発達をみていない時代の観察としてわれわれは

自利心の無自覚ないしは自ら進んで自利をはかろうとしない性質、 ごとく、早くもすでにミルによって指摘されるところであった。 こと、これである。小売市場のかかる意味での不完全性は、 ③したがって、小売取引においては、同一物品に多数の価格のある みれば、①競争と伝統あるいは慣習の両者の作用、②消費者各自の ここにおいて、ミルにおける小売市場論の主たる特質を要約して かくの

およそかかるものであったと云えよう。 十九世紀中葉のイギリスにおける小売価格決定理論の状態は、 お

つつあったことを知るのである。このことは、もちろんミルが、(注9) び思想の影響のもとに、伝統の学問に幾多の(現実的)修正を加味し それを集成すると同時に、一方ではそれに対立する新たな事実およ 転期にたったミルが、古典学派の寵児として伝統の経済学を継承し、 このような意味において、われわれは社会経済の事実および思想の あげたけれども、 彼は その理由を分析して 限られた程度では ある とはその性質上全く異なり、小売が卸売のごとくでない問題をとり 以上の叙述からも明らかなように、ミルは、 いわゆる「不完全競争の概念」に少なからず期待をよせている。(注8) 小売市場は卸売市場 歴

トロム教授の言葉によれば、「イギリスは 小規模小売店の国」であ(注11) うになった。このように、商業の分野においても大規模小売形態が(キエロ) 筆者は市場論におけるミルの所論を尊敬し、これに相当の価値評価 史の推移および事実の変化にたいして、ミル以前の伝統の経済学に にも反映されるにいたった。が、しかし、当時の諸学者はいまだ経なってきた。そして、これらの市場の変貌はしだいに経済理論の上 ギリス小売商業を特色づけていたことは忘れてはならない。 拡大発展をみてきたとはいえ、反面、 変化をみた。定価制度は一般的になり、当時発展をみてきた大規模 初の経済学者がこのJ・S・ミルであったのである。 意図にこそもとづいたものであるということができよう。そして、 おけるいくたの困難や矛盾を感じつつ、 競争の条件から離れる結果となり、 るとまで主張されている程である。 小売商は小売市場でしだいに争うべからざる支配的地位を占めるよ を与えることを躊躇しない。 心を有する点をとりあげ管見をのべたのであるが、いずれにしても 済学理論の現実への接近とじて「不完全競争の理論」 上述のとおり、このような問題を正面きって理論的にとりあげた最 全競争の分析用具を用いることにたいする不満がかなりの程度強く 以上は、ミルの尨大な所説のうち卸売価格・小売価格の決定に関 八五〇年以後、いわゆる小売商業の性質はイギリスでは顕著な 小売価格決定の理論的説明に完 かくして、 小規模形態の店舗がなおもイ それらを解決しようとする 市場はしだいに完全

ナイス

経済学史上における卸売価格・小売価格形成の理論

を組成しうる

とどまったことは、ここにことわるまでもないことであろう。までにはとおくおよばず、ただ『不完全競争の領域』を指摘するに

おいてこのケアンズをとりあげてみたい。傾向を発展させたものは、ケアンズである。そこで、筆者は次節になかった。ミル以後にイギリスにおいてなおもこれらの経済理論のの基礎を超克したが、それでもいまだ完全に終りをつげたわけでは古典派経済学はミルになって発展の頂点に達し、同時にそれ自体

tion," 1936, p. 59. ラッツラフの言葉をそのまま引用してみよう。 Adam Smith lived on the eve of the Industrial Revolution, Ricardo in the midst of it, and J.S. Mill in a time when the stresses and strains of that revolution had created a social outlook and spirit vitally different from the earlier periods. また、この間の一世紀の急進的な変革については、Arnold Toynbee, "Lectures on the Industrial Revolution of the 18th. Century in England," 1884, Lecture VII, 塚谷晃弘・永田正臣共訳「英国産業革命史」七三頁参照。

(注2) J.S. Mill, "Principles of Political Economy; with Some of Their Application to Social Philosophy," ed. by W.J. Ashley, p. 436. 戸田正雄訳 「経済学原理」 ③七頁。

> (注3) ibid. p. 246.邦訳(2)七九頁、福田敬太郎著『市場論」参照。 (注4) これは同一卸売市場内では、いわゆる純粋な経済人の行 の最低価格に他の価格がさや寄せられることを意味している。 の最低価格に他の価格がさや寄せられることを意味している。 of Ratail Price Determination," 1956, p.52.

なくない。 現今、小売店では、一般に価格表示(正札)販売がおことは少みられないが、同進店で顧客により価格が異なることはほとんどでいるので、同じ店で顧客により価格が異なることはほとんどのより、小売店では、一般に価格表示(正札)販売がおこなわれの資。

(注下) ibid. pp. 242-3 邦訳(2)七二—三頁。

(注∞) D. L. Shawver, op. cit. p. 53

(注9) 舞出長五郎著「経済学史概要」上巻四八一頁。

(注10) 一九世紀後半になると、配給組織にも大きな変革をみて(注10) 一九世紀後半になると、配給組織にも大きな変革をみて打した中産階級(investor, rentier, clerk agent, proffessional worker, manager, office worker, civil servant, functionary 等)の需要をみたすために発展したものである。(J. B. Jefferys, "Retail Trading in Britain, 1850-1950, 1954. pp. 7-9. 『商学研鑽』(福田敬太郎教授還曆記念論文集・1954. pp. 7-9. 『商学研鑽』(福田敬太郎教授遺居は、当時急速に増資、1954. pp. 7-9. 『商学研鑽』(福田敬太郎教授遺居は、当時急速に増資、1954. pp. 7-9. 『商学研鑽』(福田敬太郎教授遺居は、当時急速に増資、1954. pp. 7-9. 『商学研鑽』(福田敬太郎教授遺居記述) 1954. pp. 7-9. 『商学研鑽』(福田敬太郎教授遺居、1954. pp. 7-9. 『南学研鑽』(福田敬太郎教授遺居、1954. pp. 7-9. 『商学研鑽』(福田敬太郎教授遺居、1954. pp. 7-9. 『商学の書)(1954. pp. 7-9. 『商学の書)(1954. pp. 7-9. 『商学の書)(1954. pp. 7-9. 『商学の書)(1954. pp. 1954. pp. 195

昭和三十一年一月)山中均之「イギリスにおける消費組合、 貨店、連鎖店の発展」ーニ六―七頁。 顧客により大なるサーヴィスを提供したことにある、としてい 店が顧客を他の小売形態から 奪って 自己の 味方にして いたの omic は興味深いものがある。(David A. Wells. "Recent Econ-及して小売商業に革新をもたらしたものとして、組織化された る革新が工業を根本的に革命づけたと同じく、今度はそれが波 №° (Henry Pasdermadjan, "The Department Store,-Its は、百貨店が他の配給形態よりもはるかに廉価に販売し、 大規模小売商について言及し、その経済性を強調していること Origins, Evolution and Economics, " 1954, Chapter I. II.) 郎訳「百貨店論」第一章、第二章参照 Changes, "1899. p. 109.) パスダーマジャンは、百貨 ウエルズは産業革命によ かつ 百

(独口) P.H. Nystrom, "Economics of Retailing." 1930.

死』第一巻第三号。

(注12)

拙稿「古典学派における 商業理論の展開」『三田商学研

(附記)

かれら自身を維持することを保たしめるような価格をかれらのはならない。それゆえに、かれらは必然的にその利潤によってに従事しているものは、それによって生計をたててゆかなけれここでの問題と関連してマックロード(Maclood)も「商業

経済学史上における卸売価格・小売価格形成の理論

その議論は往時のスミスの見解と全く一致することとなる。 を賦課するのを余儀なくさせるものは、 量において些細な時には、 予想される。 かし、ミルの限定が是認されるならば、 論が、非常に人口がまばらな地域だけに限られるものであれば、 of Economical Philosophy, 2nd. ed. Vol. II p. 46.) この議 ある。」とのべている。 るようにするため、 顧客に賦課せざるをえない。したがって、 …田舎の小店主をしてかれらの財貨にたいして非常に高い価格 かつ力強く語られている。 とそれから結果する高価格なる現象はどこでもみられることが このことは、ケアンズによって、きわめて明解に、 非常に高い価格を賦課せざるをえない。 (H. D. Macleod, "The Principles (H. Smith, op. cit. p. 109.) かれらは自己の生計を可能ならしめ この事情によるもので 相対的に少量の販売高 取引がその数およ

Ξ

うであろうか。 - いを継いで古典学派の体系を墨守せんとし、進んでその復興をうであろうか。 - いを継いで古典学派の体系を墨守せんとし、進んでその復興をうであろうか。 - いを継いで古典学派の体系を墨守せんとし、進んでその復興を

おいてである。 ciples of Political Economy)の第一篇第四章の「市場価値」には、彼の主著「経済学の若干の指導原理」(Some Leading Printyの主義が、卸売価格と 小売価格の 差異について ふれているの

per market price)ということになる、と。 切売市場で価格が決まる場合には、売手も買手も専門家であるから、市場のかけひきにより価格は狭い範囲で決定される。この価格ら、市場のかけひきにより価格は狭い範囲で決定される。この価格ら、市場のかけひきにより価格は狭い範囲で決定される。この価格が決まる場合には、売手も買手も専門家であるかまず卸売価格の決定については、ケアンズはつぎのようにいう。

にもとづく。いるといってよかろうと思われる。その理由は、つぎのごとき事情は、結論から先にいえば、ケアンズはミルよりさらに一歩前進してさて、すすんで 本稿の主題である 小売価格決定の 議論に おいて

ケアンズは、小売取引における価格の決定が卸売市場において決める。では、一八七四年にはじめて小売価格を言味するものである、と説あった場合よりも、ヨリ高い価格の存在を意味するものである、と説あった場合よりも、ヨリ高い価格の存在を意味するものである、と説あった場合よりも、ヨリ高い価格の存在を意味するものである、と説をもたらすことになる。このことは、ひいては完全競争が一般的でとして外用しないので、その結果は小売商の過剰と小売資本の過剰にしか作用しないので、その結果は小売商の過剰と小売資本の過剰にしか作用しないので、その結果は小売商の過剰と小売資本の過剰にしか作用しないので、その結果は小売商の過剰というでは、かった。

と指摘している。定される価格と異なる主たる事情は、つぎの二点においてである、

摩擦のもとでおこなわれるとする。() 小売市場の競争は、卸売商業におけるよりもはるかに大きな)

うに狭い小売市場で売却される商品にたいしてもしばしば異なった 不便と時間的ずれをともなうものである。かくして、買手は別の店 条件を他の競争者によって別の場所で販売される条件との比較をす 売手はただ一人しかおらず、その上に買手たる消費者は、その取引 うるのであるが、小売の取引の場合にはそうすることはできない。 いけれども、そこには一種の摩擦(friction)が存在して、 もなう。このことは、競争は小売市場においても働かないことはな ろんありうることである。しかし、そこには必ず時間的なずれをと とに気づいて、そのひいきを他のヨリ廉価な売手へ移すことはもち に行って購買の条件を比較することによってその真偽をたしかめる こなうことは必ずしも期待できないし、もしできたとしても多大の ることは、たとえ可能であるとしても直ちに(同一瞬間に)それをお すなわち、小売商業の場合では、それぞれ販売をおこなう場所には れらは相互に直接その取引上の諸条件を即座に比較する機会をもち し価格があまりにも高すぎる場合には、おそらく買手は早晩そのこ 公正なものと考えてしまう。しかし、そうはいっても実際には、も ようなことはせずに、売手の言葉をそのまま信用して、その価格を 卸売市場においては、売手および買手は同一の場所に集って、

を卸売商業から区別する一つの事情である。 (性3) (性3)

う有利な立場にある。 (コ) さらに、販売価格が卸売市場において決定される場合には、 方な十分な知識をもって精通しているという立場にあるが、他方、 うな十分な知識をもって精通しているという立場にあるが、他方、 うな十分な知識をもって精通しているという立場にあるが、他方、 のであるが、他方、 のであるが、 してのであるが、 してのでなが、 してのであるが、 してのであるが、 してのであるが、 してのであるが、 してのでなが、 してのでなが、 してのであるが、 してのでなが、 してのでなが、

は、ケアンズの云うところにしたがえば、それは特定地域(partition)の一位を設ける慣習は、商人も顧客もその頻繁な変動を不ての財貨に定価を設ける慣習は、商人も顧客もその頻繁な変動をでなく、同一地域の各種店舗においてもしばしば同一時期に非常をなる、同一地域の各種店舗においてもしばしば同一時期に非常をなく、同一地域の各種店舗においてもしばしば同一時期に非常をなく、同一地域の各種店舗においてもしばしば同一時期に非常をなく、同一地域の各種店舗においてもしばしば同一時期に非常をなく、同一地域の各種店舗においてもしばしば同一時期に非常によったが多様性(variety)が存在するけい。一句がある価格で販売せられている同一品質の商品を見出すことに差のある価格で販売せられている同一品質の商品を見出すことに差のある価格で販売せられている同一品質の商品を見出すことに差のある価格で販売せられている同一品質の商品を見出すことに差のある価格で販売せられている同一品質の商品を見出すことに表のある価格で販売を表する。

ためであること等。 明をしてくれるものをはるかにこえるところのまさに資本の過剰のいれる。 はながになるところのまさに資本の過剰のの場合であること等。

wggish action of competition)の結果、小売商数過多、小売資いggish action of competition)の結果、小売商数過多、小売資いてのべている。このことは、一八四八年には均一価格制が一般について言及したが、ケアンズは同一地域の異なった売価をつけることでついてのべている。このことは、一八四八年には均一価格制が一般のではなかったが、一八七四年にはほとんど一般に採用されていた(注6) ことを示すものであろう。

にすることを論じたが、ミルはこの要因を主として慣習(custom)よびJ・S・ミルの両者ともに小売価格が、卸売価格とその性質の異として説明をくわえたことが明らかにされた。そして、ケアンズおように、小売価格の決定を競争価格理論の適用しえない特別な場合以上の若干の叙述からケアンズがJ・S・ミルにおいてなされた

必要がある、とするのである。 さにそれを実行に移していると考えた。すなわち、協同組合店舗は(注7) 本の回転のためには、商業に投下された全資本が大幅に削減される だけの量にまで削減せしめなければならない。すなわち、迅速な資 も小売商業に求められているサービスを遂行するのに必要とされる 事業経営を逐行しているのである。そこで、現在の小売商業の資本 意を増大し、それによって資本をきわめて急速に回転し、成功裡に よって、かれらは競争者からその顧客をうばうことによりその常得 低価格をとり、あらゆる手段を通じて有効な広告をおこなうことに べきである、と。そして、ケアンズは実際に小売協同組合店舗はま のための手段は、競争を刺激し、活発化せしめることの中に求める ズだけがその解決への一つの手がかりを与えている。すなわち、そ ての批判・解明を呈示することが必要だと考えていたが、、ケアン うのである。ケアンズならびにミルは、ともにこれらの問題につい わけではないが、その機能がきわめてゆるやかにしか働かないとい た。すなわち、競争は、小売商業において完全に無能であるという 競争活動のきわめて不活発(sluggish)なること――においてい として考えており、ケアンズはその起因を小売商業の性質――その

は、スミスの時代以後の変貌した小売市場についての観察から、そのこされていたが、ケアンズおよびミル(ケアンズほどではないが)であると云えよう。よりすぐれた分析の技術は打ちたてられるべくこのすぐれた一つの分析は、ミルの見解をさらに一歩こえるもの

っていることをわれわれは知るのである。の現実の錯綜を理論的にきわめて不完全ながら一応の説明をおこな

(知一) J. E. Cairnes, "Some Leading Principles of Political Economy." 1874, pp. 106-112.

(注2) ibid., pp. 109-15.

(注:つ) ibid., pp. 112-3.

(注4) ibid., p. 113.

(注5) J. S. Mill, op. cit. pp. 246-7. 邦訳②七九一八〇頁参照。

(注7) この当時の小売商業における消費組合については、ウェルズもつぎのようにのべている。ウェルズの言葉によれば「すれての文明国の都市の種々の小売商業は、それまでの小規模なた。とくにイギリスやヨーロッパ諸国では、協同組合が急速な発展をみた。協同組合は毛皮、書籍、文房具、出来あいの衣服、帽子、また時には食料品、金物などの商品を卸売価格を僅かに上廻る値で販売するとともに、普通の商店や商人よりもはるかに大きな便宜を顧客に与えることができた。」(David A. Wells, "Recent Economic Changes,"1899, p. 109.)また、協同組合の生成および発展については、George J. Holyoake, "The History of Cooperation." 1906. I. II. および A.

Birnie, "An Economic History of Europe 1760-1939," 7th. ed. 1957. pp. 157-170. に詳しい。ホリョオクにしたがえば、一八五六年には、ロッチデール組合の資本は一二、九二〇ポンドであったものが、一八七六年には二五四、〇〇〇ポンドに増加し、実績は三〇三、一九〇に、その利潤は五〇、六六八にまで加し、実績は三〇三、一九〇に、その利潤は五〇、六六八にまでおよんだとしている。(G. J. Holyoake, op. cit. pp. 283-8.) およんだとしている。(G. J. Holyoake, op. cit. pp. 283-8.)

四

をみてみよう。
一九世紀も終未近くなると、ミルによって修正されたとはいえ、
一九世紀も終未近くなると、ミルによって修正されたとはいえ、
一九世紀も終未近くなると、ミルによって修正されたとはいえ、
一九世紀も終未近くなると、ミルによって修正されたとはいえ、
一九世紀も終末近くなると、ミルによって修正されたとはいえ、

について論じている。 ・一八八三年の彼の主著「経済学原理」(The Principles of Poli-

経済学史上における卸売価格・小売価格形成の理論シィジウィックにしたがえば、「独占」には、供給および価格を

応事によって完全に支配してしまう場合からほとんどまたは全く支充のであって、云わば独占的なものであるとする。この傾向は、小売価格についてみれば、この価格は慣習と社会の裁定のであって、云わば独占的なものであるとする。この傾向は、小売商相互間における結合というよりも、むしろ他者より廉価で売却することによってうける社会的刑罰を恐れて、価格を維持し共通の利益を分ち合うことにより、さらに一段とおしすすめられた。これらの理由のために、彼は小売価格は完全に公開的な競争が低廉ならしの理由のために、彼は小売価格は完全に公開的な競争が低廉ならしめる率をはるかにこえていたことを明らかにした。

利子を支払い、他のすべての費用を控除してから、商人の技術にたいする利潤の形での報酬を支払うに十分な程度の高さのものである、とされた。かくて、もし特別にある小売商が莫大な利潤をえているとすれば、それはその小売商人のもっている稀少な高度の技術いるとすれば、それはその小売商人のもっている稀少な高度の技術にたそれは、あたかも農耕に用いられる土地の地代が肥沃な程高いのとそれは、あたかも農耕に用いられる土地の地代が肥沃な程高いのとそれは、あたかも農耕に用いられる土地の地代が肥沃な程高いのとそれは、あたかも農耕に用いられる土地の地代が肥沃な程高いのとそれは、あたかも農耕に用いられる土地の地代が肥沃な程高いのとるく同様なことである。この場合には「独占」の条件の下においる、とされば、あたかも農耕に用いられる土地の地代が肥沃な程高いのと

るものである。もとより小売市場の特質は、売買の一方の相手方がodwill"あるいは"connexion"による販売によって説明されしかし、ここで重要なのは、別の形のものであって、それは"go-

そのものがある程度 saleable な商品」とされているのである。 費者はある店の品物が安いという一事だけからその店に走るもので にて、その行動が決せられる。したがって、これらの場合には、消費者の たっことは小売商の店は特定の品物それ自体の客ではなく、多分に であることを示すものである。 云わば「goodwill 店子のものの客であることを示すものである。 云わば「goodwill 店子のものの客であることを示すものである。 云わば「goodwill 店子のものの客であることを示すものである。 云わば「goodwill 店子のものがある程度 saleable な商品」とされているの店に走るもので で、そのものがある程度 saleable な商品」とされているのである。消費者のあるのの客であることを示するのである。 云わば「goodwill にって、その行動が決せられる。したがって、これらの場合には、消費者の で、そのものがある程度 saleable な商品」とされているのである。

> 商人とのみ取引することを利益としている。 た、普通、人は時間と手間との無駄をはぶくために特定のひいきのけた小売商の場合には、とくに主張しうることであろう。このようけた小売商の場合には、とくに主張しうることであろう。このように、普通、人は時間と手間との無駄をはぶくために特定のひいきのに、普通、人は時間と手間との無駄をはがいる。

かかる理由からして、シィジウィックの見解にしたがえば、「協ど、それだけ浪費の割合も増す結果になるであろう。果、過剰な商人および広告および販売費は社会的に無駄な費用の一果、過剰な商人および広告および販売費は社会的に無駄な費用の一かくして、小売商人の中にはつねに"connxion"のみを強力かくして、小売商人の中にはつねに"connxion"のみを強力

持しうるのは一種の Ioyality によるものであろう。 はまたさらに社会的な費用を要することであって、広告、代理店設置、得意先廻り、あるいは吸引的な店舗の飾り付けなどの費用は、 一売協同組合が、なんらそれらの方策をこうずることなく顧客を維 小売協同組合が、なんらそれらの方策をこうずることなく顧客を維 小売協同組合が、なんらそれらの方策をこうであって、広告、代理店設 はまたさらに社会的な費用を要することであって、広告、代理店設 に恰好なものである」とする。 (注6) 「組合店舗が顕著な成功をみたのは、まさにこの事実を説明するの

nomics)が一八九〇年に公にされる 以前においても、 小売価格のかくのごとく、マーシャルの「経済学原理」(Principles of Eco-

親と高価な小売価格への鋭い批判となって現われたのである。 親と高価な小売価格への鋭い批判となって現われたのである。 親と高価な小売価格への鋭い批判となって現われたのである。 親と高価な小売価格への鋭い批判となって現われたのである。 別と高価な小売価格への鋭い批判となって現われたのである。 別と高価な小売価格への鋭い批判となって現われたのである。 別と高価な小売価格への鋭い批判となって現われたのである。 別と高価な小売価格への鋭い批判となって現われたのである。 別と高価な小売価格への鋭い批判となって現われたのである。 別と高価な小売価格への鋭い批判となって現われたのである。

て、この思想の流れがマーシャルにうけつがれてゆくことになるわり、「新古典派」(Neo-Classical School)として生まれでたケムブ格の経験に直面し、それを現実的・経験的に把握すべく、しだいに方典派的な自由放任——競争価格原理からはなれ、経済現象をヨリ古典派的な自由放任——競争価格原理からはなれ、経済現象をヨリ古典派的な動学的に把握する方向にすすむにいた大きな感化をあたえため、「新古典派」(Neo-Classical School)として生まれでたケムブと、この思想の流れがマーシャルにうけつがれてゆくことになるわて、この思想の流れがマーシャルにうけつがれてゆくことになるわて、この思想の流れがマーシャルにうけつがれてゆくことになるわて、この思想の流れがマーシャルにうけつがれてゆくことになるわて、この思想の流れがマーシャルにうけつがれてゆくことになるわまり、「新古典派」(Neo-Classical School)として生まれでたケムブルに方もない。

(独一) Henry Sidgwick, "The Principles of Political Economy," 3rd. Edition, 1901. p. 347.

(注2) ibid., p. 330. p. 94. 参照。

経済学史上における卸売価格・小売価格形成の理論

(注3) これは後に、スラッファ、ロビンソン、チェンバリンによある。(能谷尚男「近代経済学」 八九―一〇六頁参照)ある。(能谷尚男「近代経済学」 八九―一〇六頁参照)ある。(能谷尚男「近代経済学」 八九―一〇六頁参照)ある。(能谷尚男「近代経済学」 八九―一〇六頁参照) これは後に、スラッファ、ロビンソン、チェンバリンによある。(能谷尚男「近代経済学」 八九―一〇六頁参照)

(独4) H. Sidgwick, op. cit. p. 411.

光郎共訳「近代経済学説史」(上)六八頁参照。 光郎共訳「近代経済学説史」(上)六八頁参照。

として考えることができる。(D. L. Shawver, op. cit. p. 49.) 舗がイギリスの古典派、新古典派経済学者によって好意をもっ(注6) H. Sidgwick, ibid. pp. 410-11.このように、協同組合店

五

売価格と卸売価格との関係については、すでにJ・S・ミルが注目のであるが、実際上、小売価格の変動は比較的緩かである。この小のであるから、当然に卸売価格の変化に応じて高低する傾向をもつ元来、小売価格は原則として卸売価格を基準として形成されるも

に関して興味深い観察をおこなっている。していたことは前にのべたところであるが、マーシャルも同じ問題

べている。 説明については、未刊の原稿としてのこした「小売価格」の中でのいて」なる章節で展開しているが、卸売市場と小売市場との差異のいて」なる章節で展開しているが、卸売市場と小売市場との差異のマーシャルは、彼の市場論をその著「経済学原理」の「市場につ

定される。」(傍点筆者)と説く。したがって、小売商業には、小売(注1) ごとき主張は卸売価格については全く不可能である。というのは、 卸売市場では、取引当事者はいわゆる商人顧客であって、彼は個々 商の数が多ければ代価は安くなるというアダム・スミスの原則はあ(性名) 全な自由競争はおこなわれないことになる。これに反して、かくの 配しているので、小売商の数がいくら多くなっても、その間には完 てはまらないのである。小売商人は各自それぞれの独自の領域を支 生産者の場合には不可能な程度自由に各個の好むところの代価に決 こで、彼の価格は、商人顧客に商品を供給する仲介商または普通の の手数料をその費用に適応せしめねばならぬということはない。そ 人がこの顧客関係を悪用すれば、早晩これを失ってしまうことにな れば、つねに部分的に限られた地域的独占をもちうるとし、もし商 の所説を展開している。「小売商人は 一度好い顧客関係を確立しう 分に説明しつくせない特別のものとしてとらえて、つぎのようにそ マーシャルもまた小売価格を伝統的な市場価格の分析によって十 しかしながら、彼がこの独占を保有している限り、彼は諸用役

からである。かな率は、その取引量が大であるから、彼の利益に大きく影響するかな率は、その取引量が大であるから、彼の利益に大きく影響するする者を発見するであろう。なぜならば、商人が買入れる商品の僅の原価以上であれば、彼は同種類のものを一層低廉なる価格で供給の商品につけられた価格を吟味し、もしその値段がはるかにその真の商品につけられた価格を吟味し、もしその値段がはるかにその真

して、もっとも安価な市場を探しだすために十分の労力と時間とを費すよりも他にもっと有効に使う道があり、さらには、品物の質の点についても消費者はよい判別者でないからである。このように、一般の消費者は、鑑識力に乏しいためにしばしば誤った判断をすることがある。かかる場合、小売業者は小売価格を原価に順応させることがある。かかる場合、小売業者は小売価格を原価に順応させることよりも、消費者の堪えうる限度での高い代価をつける傾向がある。すなわち、小売業者は顧客が正しい判断をなしえない品物や顧る。すなわち、小売業者は顧客が正しい判断をなしえない品物や顧る。すなわち、小売業者は顧客が正しい判断をなしえない品物や顧る。すなわち、小売業者は顧客が正しい判断をなしえない品物や顧る。すなわち、小売業者は顧客が正しい判断をなしえない品物についてはある品物の卸売価格の下落をほとんど知らずに、小売業者は卸売価格の下落にともなって小売価格を下げることはきわめておそいことを指摘している。

細詳にふれられないが、)ここではある 小売業者は 経営上の方策とに下落しない理由を 種々説明しているが、(本稿では 紙幅の関係でマーシャルは、その後で小売価格が卸売価格の下落に応じて同様

ている、と論じたのであった。(注5)して、卸売価格に関係なく小売価格を変更できる独占的地位をもっ

要するに、イギリスにおける一九世紀という百年間は資本主義の要するに、イギリスにおける一九世紀という百年間は資本主義のの方法をヨリ精密化するとともに、それを高度資本主義の現実にその方法をヨリ精密化するとともに、それに代って小売価格の決定を完全競争の例外として把握しよれ、それに代って小売価格の決定を完全競争の例外として把握しよれ、それに代って小売価格の決定を完全競争の例外として把握しよれ、それに代って小売価格の決定を完全競争の例外として把握しよれ、それに代って小売価格の決定を完全競争の例外として把握しよれ、それに代って小売価格の決定を完全競争の例外として把握しよれ、それに代って小売価格の決定を完全競争の例外として把握しよれ、それに代って小売価格の決定を完全競争の例外として把握しよれ、それに代って小売価格の決定を完全競争の例外として把握しよれ、それに代って小売価格の決定を完全競争の例外として把握しよれ、それに代って小売価格の決定を完全競争の例外として把握しよれ、それに代って小売価格の決定を完全競争の例外として把握しよれ、それに持つの対象を表表している。かくて、われわれは一人に対象を表表している。

(注1) A. Marshall, "Retail Prices, in Memorials of A. Marshall," ed. by A. C. Pigou, 1925, p. 353. 宮島綱男監訳「マーシャル経済学論集」 六六七頁参照。 同様の 主張 は、A. Marshall, "Industry and Trade," 1919, p. 182. にみられる。

その見解を表明している。 すなわち、「商店主及び商人に対し篇第五章「資本の種々なる使用について」の中でつぎのように(注2) スミスは小売商業の競争の側面に関して『国富論』第二

経済学史上に

おける卸売価格・

小売価格形成の理論

(注3)

マーシャルは、

「原理」の中で 一物一価としての

ある。 限られてゐてそれ以上であることはできない。そこで、 の種の人々は如何にその数を増しても、 op. cit. 彼等の競争はまさにそれだけ増大し、彼等がその価格をつりあ く売らしめる、そしてもしそれが二十人に分割されるならば、 争は彼等両人をして、それが一人の手にある場合よりもヨリ の資本が二人の別々の雑貨商人に分割されるならば、 に使はれ得る資本はそれだけの分量のものを買ふに足るだけに 及び附近の需要によって制限せられてゐる。 ある特定の都市において売却せられる雑貨の数量は、 あり得るが、 を制限したりすることは、 て反感を抱くものがあるけれども、 げるため聯合する機会はそれだけ減るのである。」(A. Smith, ける競争に全幅の信頼をおいたが、その背後にはいわゆる「完 廉になる、という点であった。このように、 は消費者の需要であること、 全競争」が想定せられていたことは明らかである。 人数の制限反対の主要な論拠は、小売商人の数を規定するも 消費者双方とも害せず、 それ故、この種の人々に対して税を課したり、 pp. 341-342. 邦訳(二五六―七頁) ここでの 小売商 社会公共を害する虞れはないからである。 全く必要ではない、 消費者にとってかえって価格は低 および小売商人相互の競争は生産 それは全然根拠なきも 相互に害し合ふことは それ故に、 スミスは市場にお といるのは、 その都会 彼等の競 雑貨商 もしこ ば

九五

Economics, 8th. ed. 1920. p. 273. 大塚金之助訳「経済学原 までもなく、すでにJ・S・ミルにおいて喝破されていたこと の最低価格をほぼ精確に熟知して、それ以上は払わないからで 五シリングで売っている場合には、その隣りの乙製造家が六シ かし卸売価格の場合には全くこれとは異る。甲製造家が紙束を ある。」と。しかし、このことは、マーシャルをひきあいにだす に 云っている。 格 ングで売ることはできない。紙の取引を営業とする者は、紙 ついては余り頓着しない。紙一包を買うのに甲の店ではニシ ングで買えるものを乙の店で半クラウン払うこともある。 と一物多価としての小売価格について具体的につぎのように **Ⅱ**二 : —二二頁。 すでにのべた通りである。(A. Marshall, Principles of すなわち、「小売取引上では、 人は 些々たる購入

によって後者を不変とする。 って小売価格を不変とし、前者の下落にたいしては品質の向上邦訳六六七頁。卸売価格の騰貴にたいしては、品質の低下によ(注4) A. Marshall, "Ratail Prices," op. cit. p. 353.

(注5) ibid., pp. 353-7. 邦訳六六八—六七二頁。

六

いての分析を 要約すると、 卸売価格は 競争価格の 定型としてとらさて、ここで以上の諸学者による卸売価格と小売価格の乖離につ

れるべきものであった。そしてこれは、 格は、また経済社会に美しい調和を約束する「見えざる手」そのも の世界とでもいうべきものであった。したがって、そこにおける価 しても、小売価格は結局において卸売価格に一致するという考えが とりあげられているわけである。 て、このことの典型的な場合として卸売価格と小売価格との関係が ないことは、ここで改めて詳述するにおよばぬことであろう。そし 不調和な現実の分析への理想型として、第一次的な意味しかもちえ 結びついている基本的な見解であった。しかし、これはあくまでも 経済の本然の姿というより、むしろ競争社会の例外的現象とみなさ のであった。換言するならば、かれらにとっては競争の不完全性は その底流に含まれ、現実はすべて競争価格に支えられるいわば調和・ めに、ミルにしても、ケアンズにしても、さらにシィジウィックに 体系化であり、正常状態の分析であり、競争理論の純化であったた かわらず、かれらが意図していたところは何よりもまず経済理論の た。だが、しかし、かれらはこのような認識に到達していたにもか え、小売価格はそれから若干のゆがみをもつものとしてとらえてい マーシャルにおいてまでも

慢、無知、不注意に支配されている結果、そこでは完全な自由競争し、小売市場においては、消費者の非合理的な購買動機あるいは怠り、需給関係のわずかな変動にも応じて頻繁に変動するが、これに反で成立する価格であるから、需給関係にたいしてもっとも敏感であすなわち、卸売価格は比較的完全な自由競争がおこなわれる市場

が抜げられる。ために、卸売価格についてはだいたい一物一価の法則が妨げられる。ために、卸売価格については自由競争が不完全であるために、同種同質の商品が同一市場において、同時に異なった価格と小売価格との不一致の原因を一応問題としてとりあげてはいるが、小売価格との不一致の原因を一応問題としてとりあげてはいるが、かれらにとって何よりも重要なことは、山川教授も指摘されているように、あくまでも競争価格成立の条件の吟味であり、これら卸売価格と小売価格との開差の論議は、その間に 挿入された「一つの価格と小売価格 との 開差の論議は、その間に 挿入された「一つの価格と小売価格 との 開差の論議は、その間に 挿入された「一つの一個格と小売価格 との 開差の論議は、その間に 挿入された「一つの一個を上売価格との開発の論議は、その間に 挿入された「一つの一個を上売価格との開発の論議は、その間に 挿入された「一つのでははでいた。

えにも意義があることと思われる。の学者の位置づけは、われわれの意図する理論商業経済学研究のうがれのなかに一貫して貫かれていく点を考えれば、こうしたこれらいった。マーシャルの所説の基調が、その後のイギリス経済学のなしかし、A・スミスをはじめとして、ミル、ケアンズ、シィジウ

にうつることになる。かかる資本主義経済の歴史的発展につれて、立をみたとされる資本主義社会は、二十世紀の初頭以来、独占段階くして一六世紀にはじまり、一九世紀にいたって産業資本主義の確に発展せしめ、独占転化への不可欠な前提をつくりだしてくる。か自由競争は大規模生産をうみだし、小経営を駆逐し大経営をさら

経済学史上における卸売価格・小売価格形成の理論

う。そして、この不完全競争の理論を前述のごとき特異な性格をも 経済現象の理論的解明をはかろうとしたものにほかならない。(注4) 典派的価格理論は、 かような仮定のうえにたつ経済理論は現実とのギャップをますます 派的な自由競争あるいはヨリ精緻な表現である完全競争の経済理論 りをこの不完全競争理論に求めたことは余りにも当然なことであろ ら一連の経済理論は、 的競争の理論」(1933)およびロビンソンの「不完全競争の経済学」 に競争の不完全性の積極的認識をすて理論の抽象性に徴していた古 して、時に応じて参照せられるものに過ぎなくなった。それととも(注3) 発揮しえず、ただ現実に作用する競争を鮮明するための手がかりと 明性をさえぎり、市場の不透明性を加える方向を強めてゆくとき、 妥当性しかもらえないものであるが、資本主義の高度化が市場の透 このような一九世紀の経済学者によって想定されるところの古典学 つ小売商業の領域にあてはめることにより、 て、その後の商業の経済学的分析を意図した諸学者が、その足がか うな資本主義の発展に照応したものであったのである。そしてこ 先駆的業績をうけついで展開されてくるのは、基本的には、このよ 的妥当範囲はいよいよ縮小することになる。チェムバリンの「独占 大きくし、現実の市場を分析するための用具としての意義を十分に (1933)等の不完全競争に関する一連の経済理論が、スラッファの 自由競争資本主義段階の経済の現実についてさえも、 抽象理論としての意義をもつだけで、その具体 従来の完全競争論、独占理論では清過された われわれは小売市場が 近似的な

(waste)の多い分野であることをも説明しうるのである。きるのである。 それと同時に、 小売市場は 非常に 非合理的な無駄一つの典型的な不完全競争の支配をうけていることを知ることがで

九五九年二月稿) 九五九年二月稿) 九五九年二月稿)

雑誌』、第一二八号三六頁。(注1) 山川義雄「経済理論と配給理論」(1)『早稲田政治経済学

三号。三五―六頁。) てのべているので参照されたい。(『三田商学研究』第一巻、第(注2) 理論商業経済学研究については、拙稿、前掲論文におい

tion." Changing Perspectives in Marketing, ed. by tion." Changing Perspectives in Marketing, ed. by

ことが求められる。

価格の理論は、

これらの 綜合を 基礎とし

価格の問題にすすむ

形成されるべきであると考える。

を深めた上で、これらの具体的事情から、

とつては、まず交換の対象、

機構、

取引、

機能等に関する認識

Hugh G. Wales, 1951, p. 94.)

(注4) 、注5) 現実をヨリ具体的に把握しようとする理論商業経済学に なる。 「本書が論証しようとするのは、 与へるといふことである。 Harvard Univ. Seventh Edition, 1956, p. XI.) 礎に横たわる仮説が考えられてゐる程に事実と密接に一致して ばしば非現実的なのは、その方法が誤っているからではなく、基 競争および独占に関する理論の技術や単なる両者の折衷とも異 って、独占の理論によって補足されている競争の理論よりも、 ともに大部分の価格決定に当って結びついているから、 berline, "The Theory of Monopolistic Competition," 実に適合しないことがその原因であるとした。 を用いられた方法の誤りではなく、基礎にある仮定が実際の事 のごとく、チェムバリンは、 いないからであることが明らかになる。」と主張している。 一つの混合理論の方がはるかに価格体系の研究に明瞭な接近を チェムバリン は「独占的競争の 純粋競争の理論とこの結論とをくらべると、 そこで生ずる分析の技術は、 旧理論の非現実性に関して、それ 独占的な力と 競争的な力とが 理論 の 序文に (E. H.Cham: 経済学がし 普通の したが お いて